

教学 IR レポート

第3号

DP 到達度分析(2021～2023 年度前期)

教学マネジメント指針にもあるように、大学教育には3つのポリシーに基づいた教育とその検証が求められるようになりました。特にディプロマポリシー(以下 DP)は、本学の各学科専攻の教育目標であり、そこには到達・獲得すべき資質や能力が述べられています。今回は、その DP にある資質・能力の到達水準データ(平均)の年間・学年比較等を通して、各学科専攻の教育体制と教育課程を振り返ることを目的として、そのデータを分析・可視化しました。データは、教務課・教務委員会より提供いただきました。ここに御礼申し上げます。

《対象データ》

2020 年度から 2023 年度前期までの、各学科専攻の DP に記された資質・能力(学修評価票)に関する学生データです。

《対象期間》

2021 年度前期～2023 年度前期。

《データ算出方法》

対象データである各資質・能力のデータは0～4の範囲をとります。また、これらのデータは、各科目が各 DP に関与している度合いとその科目の成績素点を積算した値を加算平均して出しています。

0～1:可

1～2:良

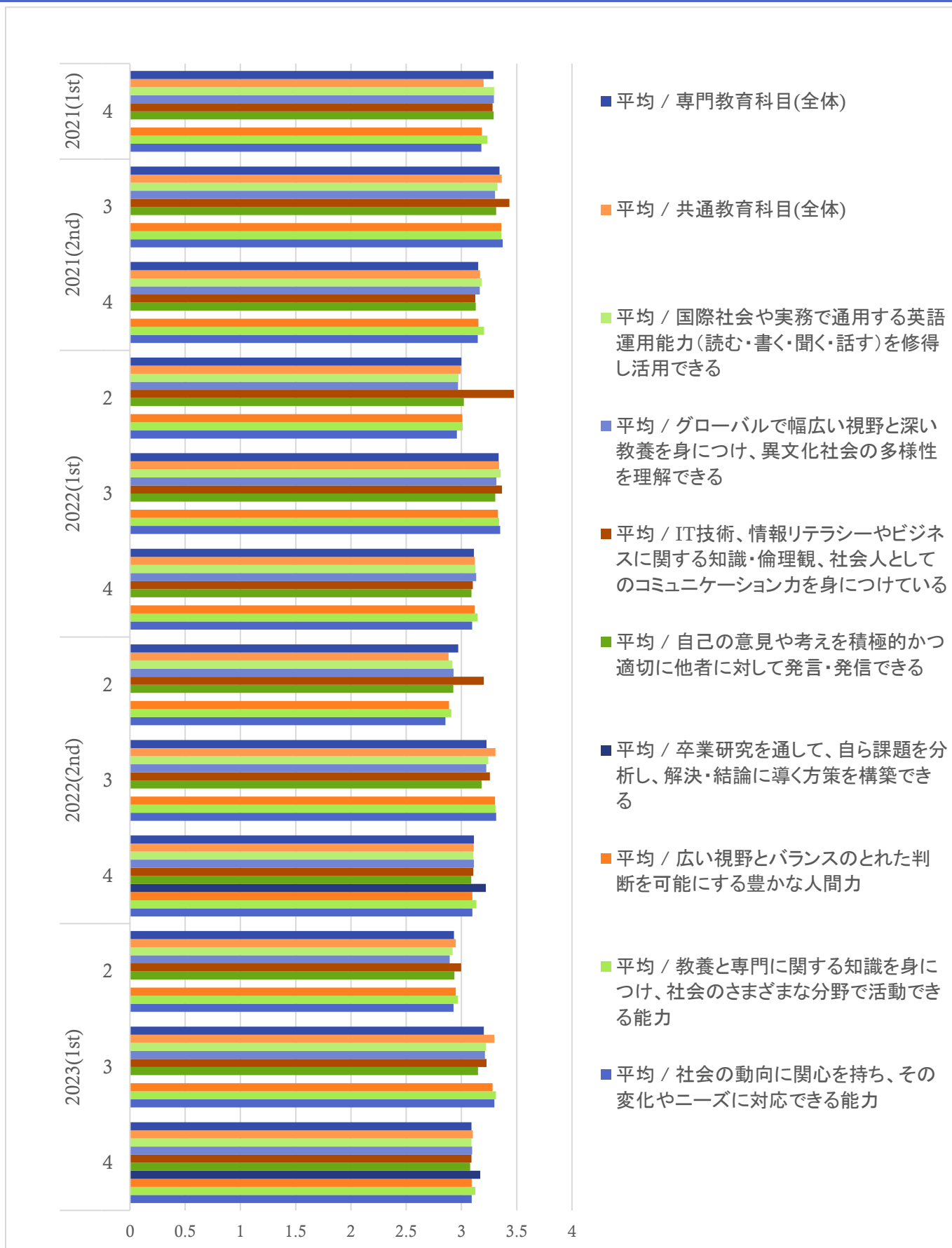
2～3:優

3～4:秀

《分析方法》

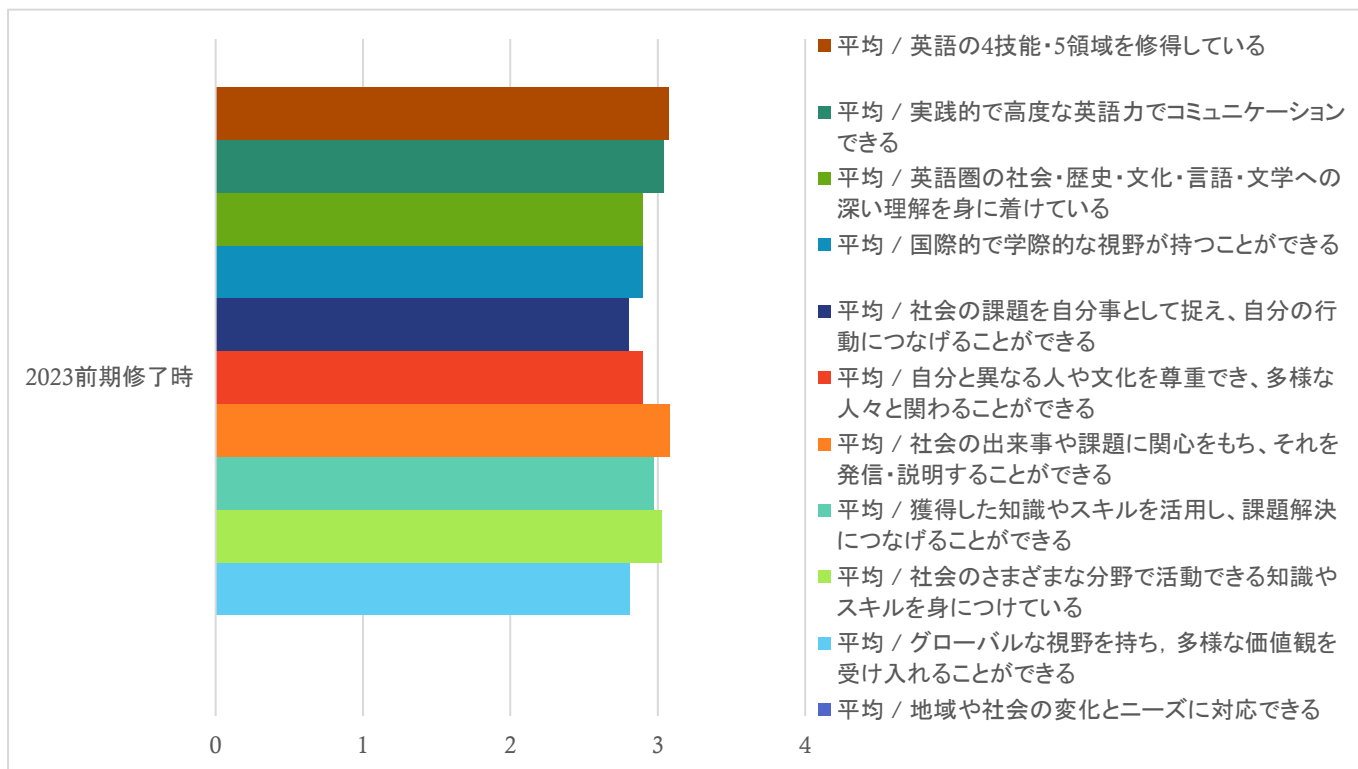
年度(前期・後期)や学年ごとの平均値を算出し、グラフ化しました。

キャリア・イングリッシュ専攻



(2022年度以前入学者)

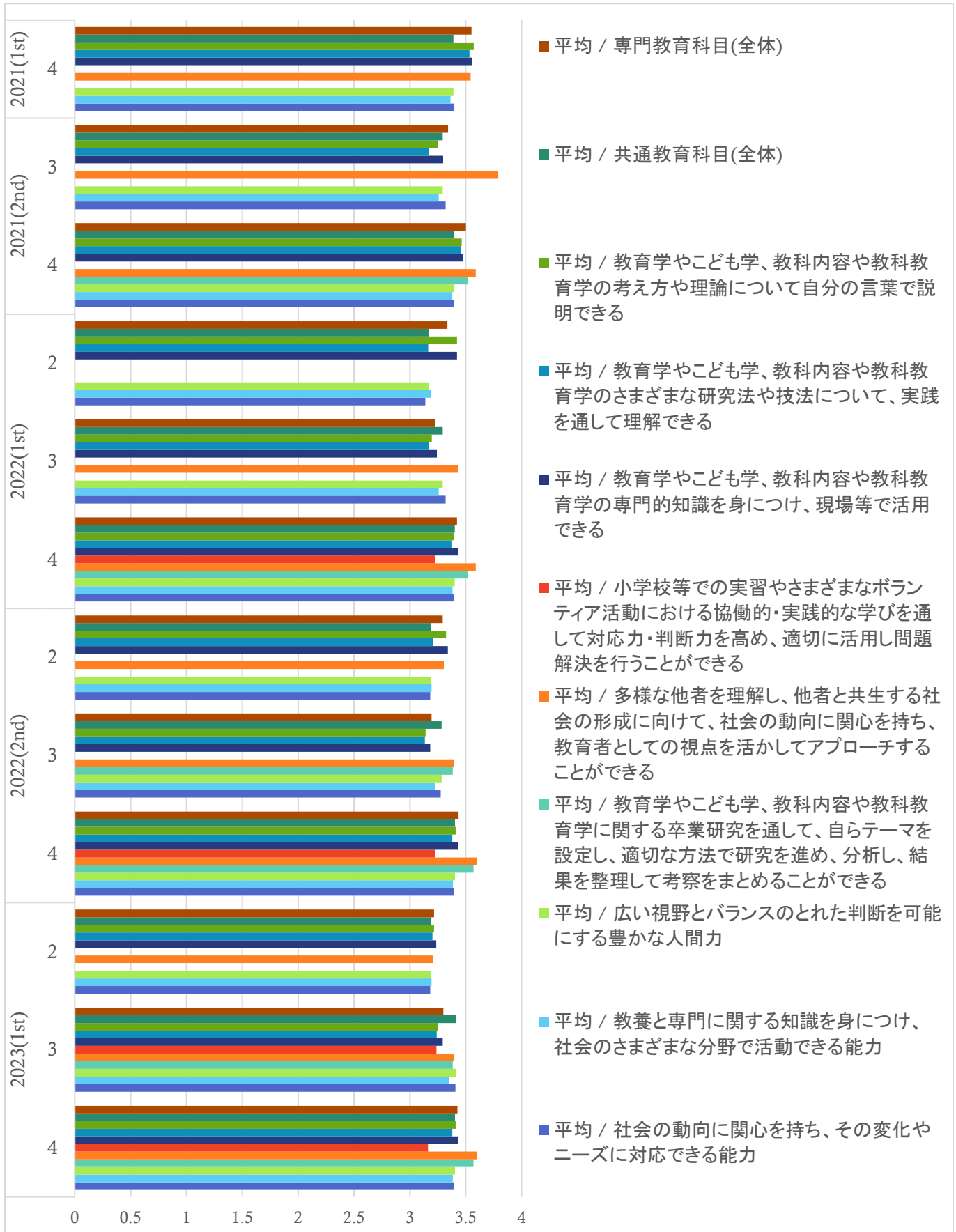
- ・現3年生のDP到達度はどのDPでも他の学年より高い
- ・現2年生の2022年度の「IT技術、情報リテラシー・・・」が特徴的に高い



(2023 年度入学者: 現 1 年生)

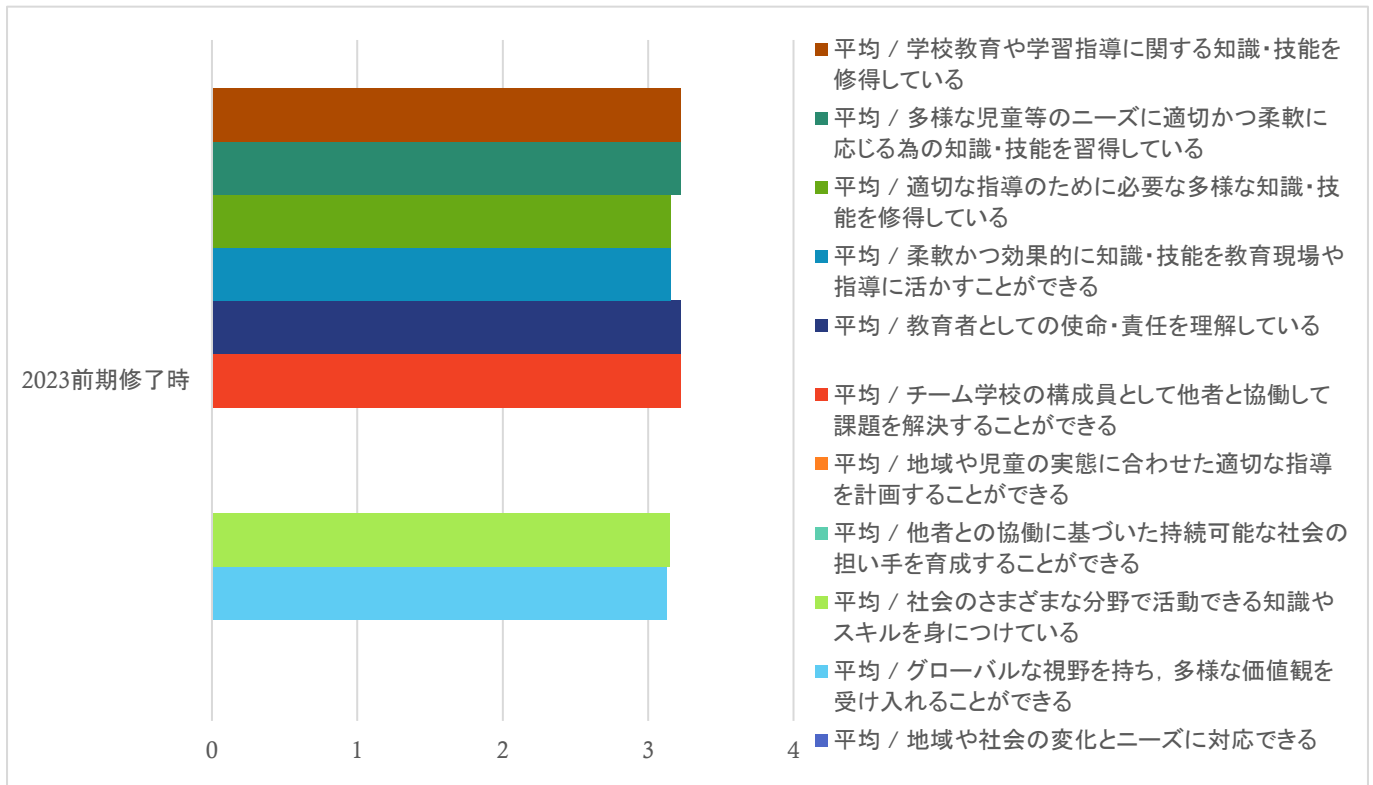
・「社会の課題を自分事・・・」「グローバルな視野を持ち・・・」が低い

児童教育専攻



(2022 年度以前入学者)

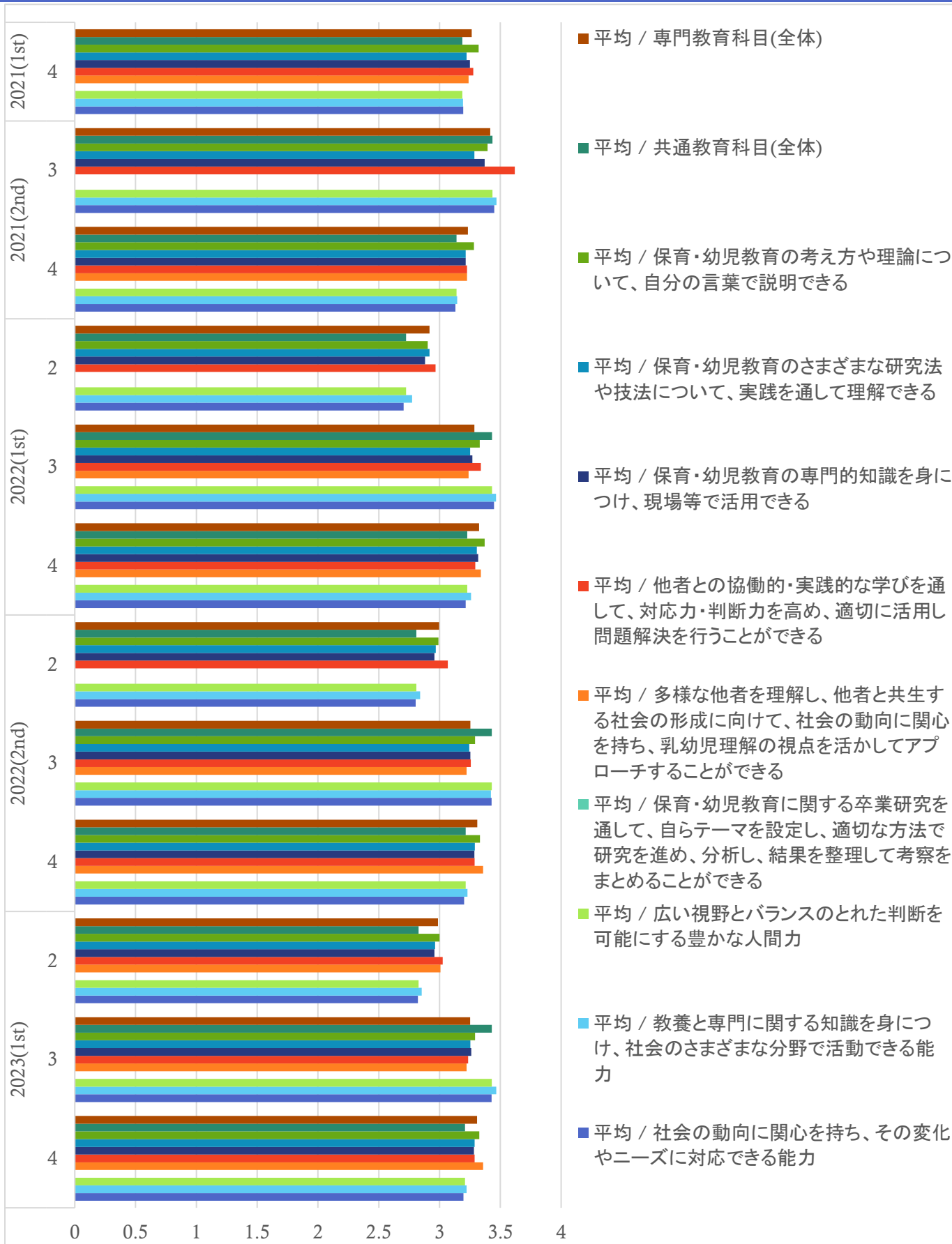
- ・現4年生は年度・期を通じて一貫して到達度が全体的に高い
- ・現3年生の 2021 年度後期の「多様な他者を理解し・・・」がとても高い



(2023 年度入学者: 現 1 年生)

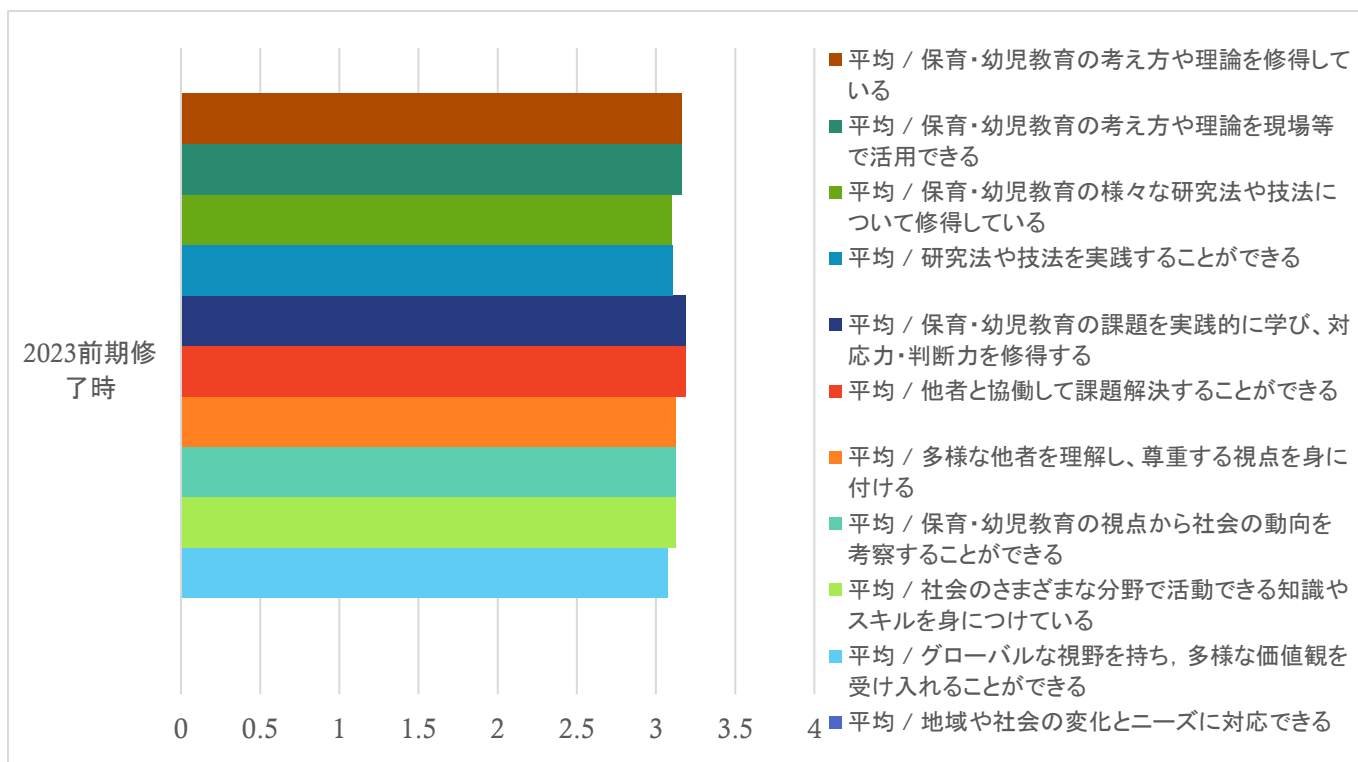
・どの到達度も平均して3を超えて高い

保育・幼児教育専攻



(2022 年度以前入学者)

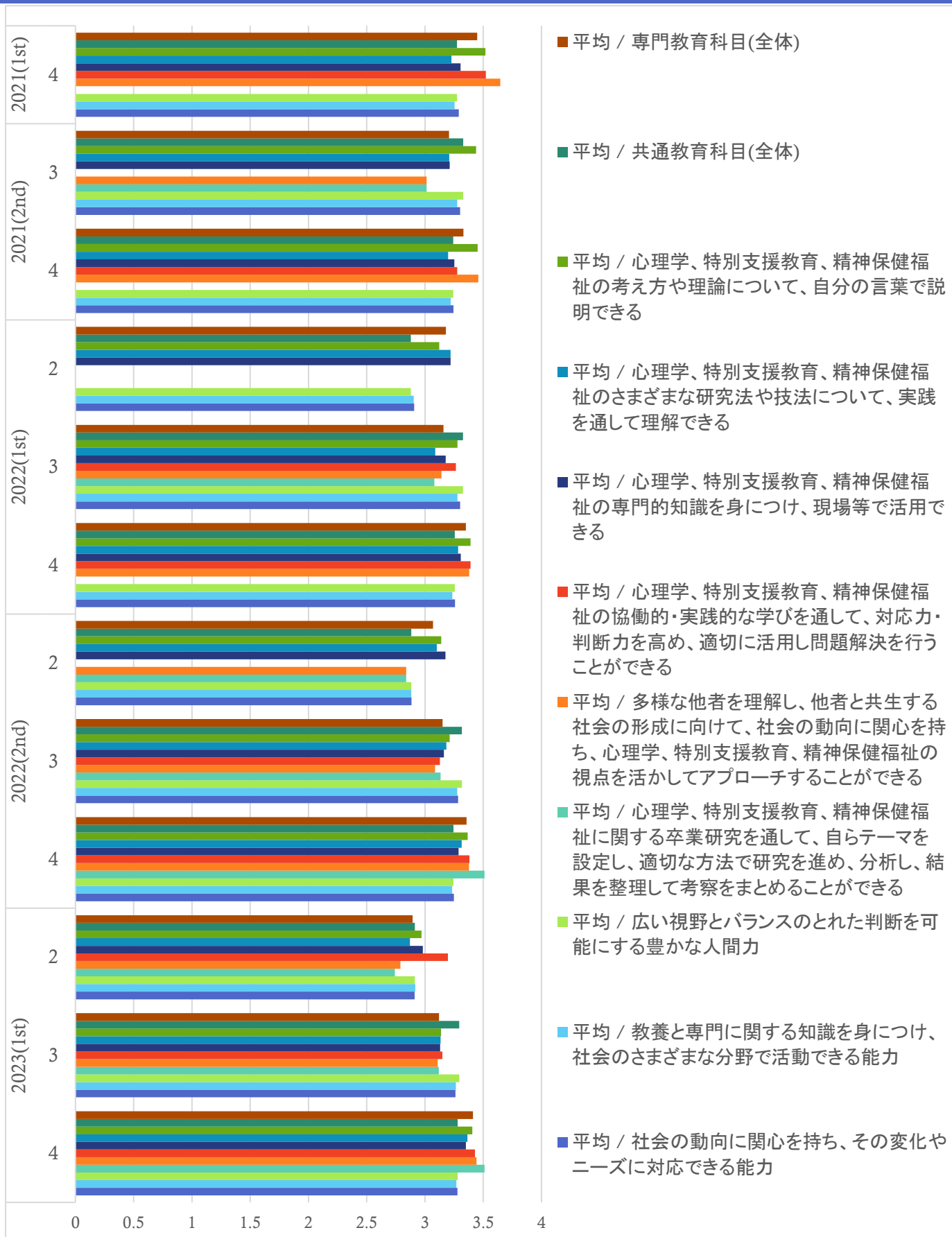
- ・現2年生は年度・期を通じて一貫して到達度が全体的に低い
- ・現3年生の 2021 年度後期の「他者との協働的・実践的な学び・・・」がとても高い



(2023年度入学者:現1年生)

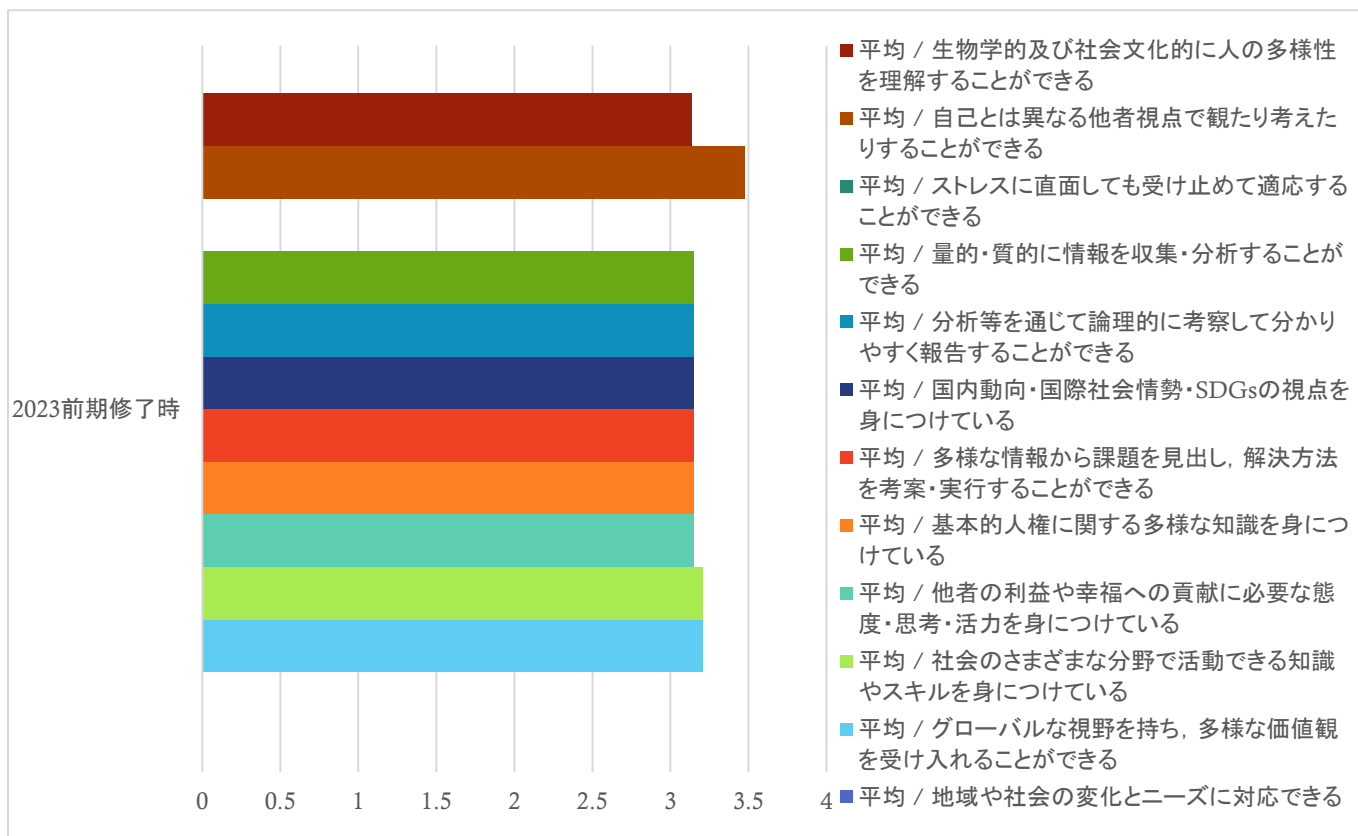
・どの到達度も平均して3を超えて高い

心理臨床学科



(2022 年度以前入学者)

- ・現2年生は年度・期を通じて一貫して到達度が全体的に低い
- ・現4年生の 2022 年度後期と 2023 年度前期の「・・・に関する卒業研究を通じて・・・」が高い



(2023 年度入学者:現 1 年生)

・特に「自己とは異なる他者視点・・・」がとても高い

教育体制・教育課程の検討

2023年9月14日の学長室会では、上記のDP到達度データの集計・分析結果をもとに、大学全体または各学科専攻の教育体制・教育課程を振り返るとともに、問題点・改善点を検討するための議論が行われました。

キャリア・イングリッシュ専攻で、現2年生の2022年度の「IT技術、情報リテラシー・・・」の到達度が特徴的に高かったのは、情報系科目の授業担当者が変わったことが大きいのではないかという意見が出ました。また、2023年度新課程に入学したキャリア・イングリッシュ専攻1年生で、1年前期の「グローバルな視野を持ち・・・」の到達度が低かったことについては、グローバル・スタディーズという科目を受講してグローバルの視点から問題をとらえることができることが期待されたが、そうした科目の効果についてより詳しく検証する必要があることが確認されました。

また、保育・幼児教育専攻において、現2年生のどのDP到達度も他学年に比して低いことについては、成績評価ガイドラインに基づいた成績評価が本格的に実施されたことが一因ではないかという意見が出ました。ただし、心理臨床学科の現2年生においてもDP到達度が他学年に比して低かったことから、現2年生のDP到達度の低さには学生の入学前からの資質・能力も一部関係しているのではないかという指摘も出ました。

心理臨床学科では、2023年度新課程の現1年生で特に「自己とは異なる他者視点・・・」の到達度がとても高かった。これについては、「自己とは異なる他者視点・・・」の到達度に関する科目は本来NP(合格・不合格)評価であったが、GP(Grade Point)評価を行ったために、多くの学生が高いGPになってその到達度が非常に高くなったのではないかという意見がありました。

2022年度までの教育課程が一部見直され、2023年度より、科目間の関連性や教育目標に基づいた科目の体系性が議論された教育課程に再編されましたが、今後も学生個々のDP到達度の経年変化を追跡して、再編された新課程の適切性を点検・見直ししていくことが重要であることが確認されました。また、各学科専攻で教育目標が異なりますが、各教育目標に学生がどの水準まで到達しているのかを把握するためにDP到達度が有効であることも確認されました。

さらに、学長室会では、DP到達度やその公表の仕方に関する議論も展開されました。まず、DP到達度はカリキュラム・マップと成績素点に基づいて計算されますが、その成績素点の評価の在り方に教員の個人差があるため、DP到達度がどこまで信頼できるものなのかという疑義が出ました。また、カリキュラム・マップはあるものの、DP到達度と科目との関連性を見渡すことができないために、学生は自分がどの領域の科目に力を入れてよいか分からない、また教員組織ではDP到達度に基づいて科目の体系性や課程の見直しを検討することが難しいという意見も出ました。さらに、DP到達度の信頼性を保つためには、教員評価をベースとするDP到達度に対して学生のDP到達度に関する自己評価との相関関係も検討すべきではないかという意見も出ました。こうした議論は、まさに現代の大学教育で問われている、「学修成果の可視化」「学修者本位の教育」に大きく関わる内容です。

DP到達度の自己評価については、2023年度より学生が振り返って自己評価を行い、次期の到達度を設定できるようなサイトをシステム内に導入し、学生にその入力を促す取り組み(オリエンテーションや教員個別面談)が始まりました。こうした取り組みは本来、学生の学修に対するモチベーションを喚起することにあります。先述した意見の1つは、そこで得られた自己評価データをDP到達度の信頼性を確認するための指標として使うことはできるということを示唆しています。

DP 到達度と科目の関連性を視認できるようにすることについては、学修者本位の教育の在り方に関係します。学修者本位の教育とは、大学側は学生が何を学び、身に付けることができるのかを明確にし、学修の成果を実感できる教育を行うということです。学生は低い DP 到達度の科目はどれか、どの科目を今後努力しないといけないかを理解できるようになっている必要があります。今回のレポートの在り方もそうですが、カリキュラム・マップを使ってどのように DP と科目の関係を学生や教員に見せていくかを検討する必要があります。

DP 到達度に影響する成績評価の教員間個人差については、成績評価ガイドラインでその個人差を一定程度抑制はしているものの、ガイドラインだけでは語りつくせない要素を幾つも含んでいます。学長室会でも成績評価を厳格化することの難しさが話題になりました。教員間個人差が抑えられた厳格な成績評価は「学修成果の可視化」「学修者本位の教育」の大前提でもあるだけに、学長室会でも、これから教員組織で議論・検討していく必要があることを確認しました。

発行

〒860-8520 熊本市中央区黒髪3-12-16

九州ルーテル学院大学

IR・情報委員会／総務課 IR 情報室

2023年9月15日発行